

「東アジア戦略概観 1996-1997」の概要について

第1章 東アジアの安全保障環境

1 不安定が続く北東アジア

東アジアの状況は、北朝鮮の核兵器開発疑惑、台湾海峡危機等に見られるように冷戦後も依然として不安定で不確実である旨記述した。

2 米中間の摩擦と共存

東アジアの戦略環境を左右する最も重要な軸の一つは米中関係であること、米中間では政治、外交、安全保障、経済など様々なレベルで摩擦が表面化しているものの、共通の利益も存在しており、歩み寄りの機運も見受けられること等を記述した。

3 ASEAN地域フォーラムへの期待

冷戦後の注目すべき新しい現象として多国間協議の進展が見られることを指摘した。特に、ARFの発展は、日米安保体制を補強するものとの観点からも期待される点を記述した。

4 日本の取り組み

この1年の日本の安全保障上の重要な動き（新大綱の策定、日米安全保障共同宣言の発表等）について記述した。さらに、安定的な安全保障環境構築のための日本の努力として、臼井長官の訪露、村田次官の訪中、防衛当局者フォーラム等について紹介した。

第2章 朝鮮半島

1 朝鮮半島の1年

この1年間の韓国と北朝鮮の国内動向、朝鮮半島をとりまく情勢について概観した。

2 北朝鮮の新しい動き

北朝鮮では、一部で外国人の入国制限を緩和するなど開放政策をとる動きがあることを指摘した。一方、国内の金正日体制に関しては、元首の不在の期間が長いものの、権力の不在を意味するものではなく、金正日書記の体制は確立していること、また、金正日書記は朝鮮人民軍も掌握しており、労働党に対する支配も進めていることを記述した。

3 北朝鮮の核兵器開発疑惑問題のゆくえ

核兵器開発疑惑に関しては、「枠組み合意」以後、対話と交渉が基調になっている旨記述した。

4 韓国の立場と対応策

米朝交渉に関して韓国側に若干の不満はあったものの、「四者会合」の提案以後、米韓間では政策協調が一層進んでいること、また、両国は、北朝鮮問題の長期化と混乱発生に備えるため米韓安保関係の強化を進めていること等を指摘した。

5 軍事バランスは拡大均衡

韓国は北朝鮮に対抗するための軍事力近代化を進める一方で、ロシア、中国、日本との交流を活発化していること、他方で、北朝鮮は軍事訓練を継続し、ミサイル開発を含め軍事力を強化している旨述べた。朝鮮半島全体で見れば、朝鮮半島の軍事バランスは拡大均衡の方向にあると考えられることを指摘した。

6 今後の課題

北朝鮮の権力状況と軍事力強化を考えると、北朝鮮の問題は、日本の安全保障上の考慮すべき要素として残るとの観測を述べた。

第3章 中国

1 ポスト登小平時代へ

登小平後の政治体制については、江沢民の集団指導体制への移行がほぼ完了し、安定化の方向にあると考えられること、経済面では、登小平路線の部分修正が行われ、成長率を抑制した「第9次5カ年計画」で発展が持続していること、その一方で、地方分権化、党の権威低下による「タガ」の緩みなどで社会構造は変化し、地域格差は拡大している点などを指摘した。

2 中国の軍事動向

中国は、ロシアからのSu-27戦闘機の導入などによる軍事力増強、台湾海峡における軍事演習等により、周辺諸国の対中懸念を増大させたが、現在、中国はこの「中国脅威論」払拭のための努力を行い、全方位の交流を展開していることを指摘した。また、中国が推進している国防近代化については、急速な軍の近代化には、軍事技術水準、兵器製造基盤等の制約要因が考えられることを記述した。

中国の核戦力の実態は米露には及ばないものの独自の核戦力観を持っており、弾頭、ミサイルの強化を続ける姿勢が懸念されているが、その一方、CTBTなど核管理への対応には柔軟化の兆しが見えること、人民解放軍の即応態勢については緊急展開部隊の指定などの進展があり、訓練重視の方針の下に練度は向上していること等を指摘した。

3 台湾海峡をめぐる緊張

演習を通じて、軍事的には中国の初歩的な統合戦能力と一定の攻撃能力が実証されたと見られること、演習の政治的評価としては、台湾独立反対という意思表示と事後の台湾政局への影響力を増大できたことが一応の成果といえるが、逆に国際的な対中脅威認識は拡大することとなったと考えられるこ

とを記述した。他方、中台関係の今後については、当面、両者の間に関係改善に向けての動きがあるとすれば、1998年頃が一つのヤマ場と見られると述べた。

4 中国の対外関係

米中には台湾問題などで対立要因を抱えており、早急な関係改善は厳しいが、緩和の兆候も見られること、中露関係については、両者には共通利益が多く、先の共同声明で「戦略的パートナー」と謳うなど進展も見られるが、歴史的な不信感等から関係進展には限界があること、また、海洋主権・権益をめぐる周辺地域の対中警戒感も無視できないこと等を指摘した。

5 台湾・香港の内部状況

台湾については、安定・繁栄の現状維持か、尊厳重視の現状打破かの選択の中で、国民党政権は慎重な政局運営を迫られている旨記述し、香港の返還に関しては「一国二制度」の試行の試金石と見られる旨指摘した。

第4章 極東ロシア

1 東アジアとロシア

中露関係については、政治、軍事面での協力関係が進展し、国境地域での軍事的信頼強化協定の締結や軍事交流、武器輸出などが活発化している点を指摘しつつ、中露は対米関係という観点から相互に利益を見出しているものの、中露関係が軍事同盟に至ることはないと思われることを記述した。

ロシアは、朝鮮半島での影響力の拡大を模索しており、韓国との関係を重視しつつも、北朝鮮との関係維持にも努めている旨述べた。さらに、日露関係では、北方領土問題は進展していないが、防衛庁長官の訪露、護衛艦の訪ウラジオストクなど防衛交流は進展している点を言及した。

2 極東ロシアの軍事情勢

米国との協調関係、中国との関係改善により極東ロシアの戦略的地位がより低下していること、これに伴い、極東ロシア軍は緊急度の低い地域の部隊として再編・縮小が行われていること、他方で、若干の兵器の更新・近代化及び蓄積が見られる旨を指摘し、総じて、極東ロシア軍は、資金不足、兵不足で士気も低下しており、即応能力も低下しているのが現状であると述べた。

3 混迷を深める極東ロシア

極東ロシアは、政治、経済、社会の全ての面で混乱状況が見られことが軍にも影響を与えており、北東アジアの安保環境にとっても懸念材料となっていること、例えば、太平洋においては極東ロシア軍による放射性廃棄物を含む有害軍事廃棄物の無責任な処理が問題となっていることを指摘した。また、極東地域では国境管理体制も強化されており、国境警備軍の地位向上とともに、日本近海では日本漁船に対する拿捕等が繰り返されるなど、周辺地域に一種の緊張状況を作り出している旨述べた。

第5章 アジア・太平洋地域における米国の安全保障政策

1 安全保障問題への回帰

ポスト冷戦時代のアジア・太平洋地域における米国の安全保障政策について、EASRレポート（United States Security Strategy for the East Asia-Pacific Region）前後の動きを踏まえつつ、この1年の米国の動きを概観した。米中関係については、台湾海峡危機等を挟んで両国関係は緊張したが、総じて見れば緊張から緊張緩和に向かっていると分析した。

北朝鮮問題については、基本的に「枠組み合意」のスキームの下で対話と交渉を基調としつつ進んでいる旨記述した。日米安保体制の再確認については、日米安全保障共同宣言に至る背景等について説明するとともに、同宣言に対する評価も記述した。沖縄米軍基地問題については解決に向けて一定の方向が示されたことを紹介した。

2 「封じ込め」か「関与」か

米国の対中国戦略いわゆる「関与」戦略について説明した。

3 アジア・太平洋地域における米国の軍事戦略

EASRの内容について詳しく紹介した。米国の多国間の安全保障枠組みに対する取り組み、東南アジア諸国に対するアクセス権の重視、地域安定化のための努力としてOOTW（戦争以外の作戦：Operation Other Than War）の重視等についても記述した。

最後に、総括としてアジア・太平洋地域における米国のプレゼンスの意義について述べた。アジア・太平洋地域の平和と安定は、日米安全保障体制を中心とする強固な二国間関係と米国のプレゼンスにより維持されているという現状について説明し、米国のかかるイニシアティブを高く評価した。